

歴史の中の留学生①

パラオの留学生

皆さんはパラオのエラケツという人物をご存知だろうか。実は筆者も全く知らなかったのだが、天理教の日本語教育を語る上で外せないと思い、紹介することにした。連載を始めてから日本語教科書について調べている頃、日本語教育研究者の河路由佳氏からエラケツについて何か情報があればと尋ねられた。エラケツは昭和の初め頃に天理に滞在し、天理教の学校にも通っていたということで、早速、天理教海外部アジア課に問い合わせたところ、佐藤庄司元課長の残した資料が残っていると聞き、この資料のコピーを入手した。その後、天理教海外部翻訳課の山西弘朗部員がエラケツに関する研究をしているという情報を得て、同部員を河路氏に紹介し、筆者もエラケツに関する資料を読み始めた。その結果、これは一つのドラマを読んでいるようにも思い、後世に生きる我々に感動を与えるものだとも思った。その後、山西部員より河路氏と共に、奈良市菖蒲池にある東洋民族博物館と奈良大学を訪問するという連絡があり、2019年9月筆者も同行し、新たな資料も入手することができた。前置きはこれくらいにして、集まった資料をもとに話を進めたい。

留学生エラケツ

奈良大学博物館企画展「好奇の人・北村信昭の世界『奈良いまは昔』展」のパンフレットによると、エラケツという人物は、天理教による第1回の内地留学生として1929年(昭和4)に来日し、4年間にわたって天理教の教理と日本語を学んでいたとある。昭和の初め頃に天理に留学生が来ていたことも驚きだが、エラケツは教内・教外を問わず、多くの日本人と交流し、友情を温めていたようだ。なかでも奈良・猿沢池畔で写真業を営み、奈良の文化人と言われた北村信昭と深く交流していた。筆者が奈良大学を訪問した際、文学部国文科の光石亜由美教授と木田隆文教授からエラケツに関する資料を見せていただいた。その中に、北村に宛てた膨大な量のエラケツ直筆の手紙や葉書があった。それを読んだだけでも、エラケツの日本語力が並はずれたものであったと感じた。昭和4年といえば、天理市がまだ山辺郡丹波市町と呼ばれていた頃である。遠い南国の島から来た一人の留学生がどのように流暢な日本語を習得し、日本人の友人たちと友情を育んでいったのか興味深いところである。

佐藤嘉一の導き

まだ旅客機も飛んでいない時代、そもそもエラケツはどういったことがきっかけで日本へ来たのだろうか。アテム・エラケツ (Atem Ngiraked、日本名：佐藤栄吉) は1910年パラオのバベルダオブ島カイシャル村ガシヨール (現エサール州、旧清水村) に生まれた。実父の名前はエラソプ、母がコロール島の南部大首長アテム・アイバドルに嫁し、エラケツはアテム・アイバドルの養子となった人である (『奈良大学パラオ研修報告書』奈良大学文学部地理学科2016)。また、天理教海外部アジア課に「東南アジア伝道資料調査稿(6)」という、歴代のアジア課長及び課員による南洋諸島での布教に関する記録が残されているが、それによると、最初にエラケツに布教したのはパラオ教会を設立した佐藤嘉一 (東肥分教会：現在の東肥大教会) とある。写真はハッピー姿で右襟に郡山大教会と書いてある。当時、東肥大教会は郡山大教会の部内教会であり、エラ

ケツも上級の郡山大教会のハッピーを着ていたようである。

佐藤嘉一は19歳の時におさづけの理を拝戴して入信していたが、熱心な信仰ではなかったようだ。しかし、日本郵船の船員だった時に盲腸を患い危篤状態になったが、不思議にも助かり、それから熱心に信仰を始めたようだ。昭和3年4月1日に幸夫人と共に海外布教を志し、日本の委任統治領でパスポートの要らなかったパラオへ旅立った。そしてコロールで



ハッピー姿のエラケツ (左側)
(奈良大学図書館所蔵)

熱心に布教を開始した。救済の実が次々と上がり、瞬間に300人近い信者が来るようになって、同年9月24日にパラオ教会を設立した。しかし、佐藤嘉一はその時、教会長としての資格がなく、夫人の幸が初代会長になった。その後、嘉一も資格を得て、昭和6年にパラオ教会の2代会長になった。このパラオ教会は現地の人々を布教対象にしていたので、金銭面での教会維持がなかなか思うように行かず、昭和13年に教会の名称を一旦、教会本部に預けることになった (山西弘朗「日本統治下パラオにおける天理教の布教活動」『天理大学おやさと研究所年報』第26号2020:39～40頁)。

日本の統治下にあった南洋群島では、軍政時代(1914～1918)、民政時代(1918～1922)、南洋庁施政時代(1922～1945)の3期にわたって日本語教育が行われていたようだ (関正昭『日本語教育史研究所序説』スリーエーネットワーク、1997:26頁)。昭和3年(1928)といえば南洋庁施政時代に当たり、現地住民の通う公学校で日本語教育が行われた時代である。そのため、布教も日本語で現地の人たちに行われていたのだと推測できる。エラケツも来日前に基礎的な日本語教育を受けていたであろう。その素地があったので、来日後もどんどん日本語に磨きをかけて多くの日本人とも交流を深めていたのだと思われる。

日本留学のきっかけ

エラケツの来日に関して調べていると、天理教兵神大教会の後継者であった清水芳雄の名前が出てきた。教内の高まる海外布教に際して、昭和2年に天理教教会本部に海外布教伝道部(現海外部)が設置されたが、海外の教会設置の諸手続きを担当していたのがこの清水芳雄である。清水は昭和4年にパラオへ渡り、佐藤嘉一と共に布教を開始したが、コロールで身の回りの世話や布教に随伴したのがエラケツである。清水はエラケツを弟のようにかわいがり、その素直な性格を見込んで、天理へ連れて帰り、天理教人として育てたいと思い、必ず天理へ連れて行くと約束したのである。そして日本人も多く、南洋庁のあるコロールから現地人への布教を目指し、パラオ本島のマルキヨクへ向かった。しかし、悲しいことに清水芳雄は志半ばにして Deng 熱に罹り、27歳の若さで亡くなってしまった。パラオに渡り、わずか3カ月後のことである。その無念さは計り知れないものがある。パラオにこの清水芳雄の殉教碑が建てられているが、今でも現地の人からは「Tenri」と言えばこの碑のことだと言われているようだ。